

ツ

ツヴィルグマイエル ディッケン Dikken Zwilgmeyer 一八五三—一九二三 ノルウェーでは初期の女流児童文学作家。ノルウェー南部の美しい海沿いの町リーソールに生まれた。この町に生きるインゲルヨハンネという少女を主人公にした一連の作品が代表作。インゲルの子ども時代を扱った『Karsten og jegカシュテンと私』(一八九一)、『Fra vor By 私たちの町から』(九二)、『Barndom 子供時代』(九五)や、少女の愛をテーマにした『Annikken Præstegaren アンニケンII プレステガールン』(一九〇〇)などは、今も広く読まれ続けている。(山口卓文)

ツエマツク M Margot Zenach 一九三一—アメリカの児童文学作家、挿絵画家。アメリカおよび、ウィーンで学ぶ。豊かな描写力で、自作『Self-Portrait 自伝』(七八)でアンデルセン賞、夫、ハービー・ツエマツクの作品『はんじさん』(六七)、『ダファイと小鬼』(七三)

の挿絵など、受賞作が多い。シンガー作の『メイゼルとシュリメイゼル』(六七)の挿絵も描いている。他の自作に『ありがたいこつてす』(七九)がある。(橋本圭好子)

司 修 つかさ おさむ 一九三六—(昭11—) 画家、絵本画家、童話作家。群馬県に生まれる。主体美術協会会員。絵本の絵に、『ほしのひかったそのぼんに』(一九六六)、『まちゃんと』(七八)。絵本の絵と文に、『はずかしがりやのぞう』(六八)、『おとうさんだいすき』(七五)。童話の文と絵に、『ちびっこわにのぼうけん』(七一)、『魔法のふた』(八五)、銅版画の挿絵に『野の花は生きる』(七二)など。絵はエッチング風な手法。一九七八年に小学館絵画賞受賞。(井上共子)

塚原健二郎 つかはら けんじろう 一八九五—一九六五(明28—昭40) 児童文学作家。長野県東条村生まれ。一二歳で父と死別。松代農商学校中退。雑貨店の小僧などをするが、地方新聞に盛んに投稿する文学青年でもあった。一九一六年、同郷の作家島崎藤村を頼って上京。働きながら、文学修業を続ける。一時、武者小路実篤らの「新しき村」に飛び込む。二二年二月、小説『血に繋がる人々』でデビュー。翌年、小説集『ある迷宮の舞者』を出して新進作家として注目された。その後『中央公論』に書いた長編『妻を欺く』(一九二四)は、小説の仕事での代表作となった。児童文学とのかかわりは、『おとぎの世界』(二〇・八)に『弘法様のお像』を書い

たことにはじまる。昭和に入ってから、童話作家としての活動が中心になる。雑誌「赤い鳥」に、計二二編を発表。「奇術師の靴」「酒場のケルト」「蜂の王さま」など、西洋風な童話が多かった。三二年ごろから、住んでいた東京近郊の消費組合や子ども会の活動に参加するなどして、実践活動に打ち込むようになる。こうした体験から、生活童話的作風をとるようになり三三年九月、『集団主義童話の提唱』を発表する。三七年、最初の童話集『七階の子供たち』を刊行。その後、『よい匂ひの町』(四〇)、『朝の鐘ふり』(四一)、『つばめの村』(四四)など。しだいに、多分に私小説的な生活童話が書かれるようになる。敗戦後、\*児童文学者協会の創立に参加。晩年には、会長を務めた。戦後の童話集に、『風船は空に』(五〇)ほか。ただ一つの長編『風と花の輪』(五九)で未明文学賞。同賞の賞金で、『児童文学誌』大きなタネ」を創刊(六〇・六一)。歿後に、自伝『小さな河』が刊行された(七四)。

「子供の会議」かごども 短編童話。「赤い鳥」(一九三二年一月)に発表。アパートの子どもたちが会議を開き、捨て子で、いまはアパートのエレベーターボーイのポオル君のために決議する話。「児童の集団的生活の中に於ける自主的、且つ創造的な生活を助長」(『集団主義童話の提唱』)する童話の必要を説いた作者の理念が実現されている。のち、『七階の子供たち』と改題されて、

同題の童話集に収録された。

【参考文献】山島恒「塚原健二郎解説」(一九七八『日本児童文学大系27』ほるぶ出版) (宮川健郎)

塚原亮一つかはら 一九二〇(大9) フランス児童文学研究者、評論家。児童文学者の塚原健二郎を父として東京に生まれ、一九四三年早稲田大学仏文科在学中に学徒出陣、四七年に復員。翌年にはラブレール『巨人パンタグリユエル』(児童版)を訳出。同人誌「こどもと文学」に参加後、五四〜八六年にわたり仏語・児童文学分野で国立音楽大学教授。主な訳書にギョー「角獣の秘密」(一九六九)、プールリアゲ「プークとオオカミ団」(七二)、ミッシェル・テオン「トマと無限」(七九)などがある。(桜井信夫)

槻野けいけい 一九三〇(昭5) 児童文学作家。長野県に生まれ、長野県立岡谷高女卒業後、新聞社、通信社に勤務。結婚で退職、母となつてから、地域の文化運動に参加、早船ちよらの児童文化の会に入つて創作をはじめ。我が子のために書いた『生きていくこと』(一九七三)で、第四回北川千代賞を受賞。この作に障害者を扱ったことから、以後心身障害者の問題に関心を深め、『おるすばん』(七五)、『このゆびとまれ青い空』(七九)などを書いた。

辻田東造つじた 一九〇五(明38) 昭42 詩 (草野明子)

人、翻訳家。長崎市生まれ。東京大学文学部卒業。在学中「解放」「時代文化」などに小説や詩や翻訳を発表。一九三〇年「万朝報」に我が国最初の魯迅文学の紹介となった『故郷』を連載。高校教師を務めるかたわら詩や童話を書き続け、五五年に山本和夫らと児童文学同人誌「トナカイ村」を創刊。詩集に『河畔抄』、『たべろちびっこら』(五六)があり、優れた少年詩も多い。

(西本鶏介)

辻 真先 つじまき 一九三二—(昭七—) 作家、ア

ニメ脚本家、漫画原作者。愛知県名古屋市に生まれ、一九五四年名古屋大学文学部卒業。八二年『アリスの国の殺人』によって日本推理作家協会賞、八二年ユーカーさんシリーズ『吝嗇の人』によって池内文学奨励賞、また七九年から八三年まで五年連続してアニメ・グランプリ脚本賞を受けた。文章による作品と、アニメーション、漫画による作品とを並列して生み、児童向けの仕事も多いという類例のないエンターテインメント作家である。

都島紫香 つしま 一九一〇—七九(明四三—昭五四) 口演

童話家、童話作家。本名鈴吉。愛知県生まれ。小学校卒業後、名古屋市立図書館に就職。のち中京商業に進学。卒業後、名古屋市の社会教育を担当。とくに森川紫氣、大西巨人の薫陶を受け、中京地区口演童話最盛期の大きな力となった。創作童話発表の場として、雑

誌「愛護」「童話人」(後に「愛語」などを出した。一九四七年、中心となって結成した名古屋童話作家協会は、現在の中部児童文学会にまで発展した。(赤座憲久)

辻村秋峰 つじむら 一八七二—一九四八(明四—昭二〇)

挿絵画家。本名又男。堺市に生まれる。筒井年峰門下で絵の手ほどきを受け、一九〇四年二月、久保田小塊とともに大阪に児童美術会を起こし、日本最初の絵雑誌「お伽絵解こども」を発行。同年朝日新聞大阪本社に入社、学芸部に籍を置き、家庭、初等教育、児童の部を担当。二三年一二月、朝日新聞社創刊の「ゴドモアサヒ」の編集担当。二七年朝日新聞社会事業団が創設されると計画部次長となり、子ども博覧会や、農繁期託児所助成など、少年保護事業に尽力する。

(石沢小枝子)

土田明子 つちだあきこ 一九三四—(昭九—) 詩人。本

姓斎藤。台湾生まれ。千葉県立東高校卒業。一九五七年ごろから少女詩、童話を書きはじめ、「ラルゴ」などの詩誌に所属。作品にはファンタスティックな世界に遊ぶ楽しさがあり、物語詩も多い。詩集には『草の葉のすべり台』(一九六三)、『難破船』(七六)、『少女』(八一)のほか『土田明子詩集』全五巻(八六—八七)がある。ほかに、ノンフィクション『あの日 花は』(八五)などの著作がある。

(畑中圭一)

土田耕平 つちだへい 一八九五—一九四〇(明二八—昭一五)

歌人、童話作家。長野県に生まれ諏訪中学校を三学年で中退。一時小学校の代用教員を務めるがその折島木赤彦の知遇を得て「アララギ」に短歌を発表するようになる。病弱のため一九一五年秋より伊豆大島に転地療養をし二一年春まで滞島する。経済的に困窮し資を得るために一七年春より「信濃毎日新聞」に週一回程度童話・童謡を執筆する。初期の作品は古典の再話や翻案の類が多かった。歌人としては二二年に第一歌集『青杉』を出版し、その純粋清澄な調べにより名声を得た。童話の面では二三年に雑誌「童話」に作品を発表するところから、少年期の回想を主軸とした独自の作風へと移っていった。代表作と目される『峠』、『時男さんのこと』、『お母さんの思ひ出』、『夕焼の思ひ出』などは、いずれも童心に映った父母や友人やふるさとの自然を描いたもので、郷愁と哀歎を漂わせて小品ながらそくそくと胸を打つものがある。それは、アララギ歌人として写実観照の修練を経て生み出された佳品といえよう。童話集として『鹿の眼』(一九二四)、『蓮の実』(二二六)、『原っぱ』(二二八)、『夕焼』(三三二)、『裾野』(三六)の五冊がある。病弱に加えて極度の不眠症に悩まされ、長野県内はもちろん、兵庫・奈良方面にまで居所を転々と移して療養に努めた。作品世界もおのずと己の内面に向かい、時の流れを超えた深みのあるものとなった。四九年『土田耕平童話集』が信濃毎日新聞社

より発行された。

【参考文献】『土田耕平遺稿』全三巻(一九四二 古今書院)

(高橋忠治)

土家由岐雄

ゆちや

一九〇四

(明37)

児童文学作家。本姓土屋。東京生まれ。小学校卒業後、三菱の給仕となつて働きながら「日本少年」「少年世界」などに投稿、四〇編余も入選。社の給費で東京工学校卒業。のちシンガポールに勤務したことから、国際色豊かな長編ロマン『虹の出帆』(一九四一 文部大臣奨励賞)、『ドイツ人形』(四二二)、『昭南島』(四三三)などで声

価を高める。戦後、日本児童文学協会創立に貢献。『三びきのこねこ』(五一 小学館児童文化賞)のほか幼年童話集多数。自伝を裏づける長編『東京つ子物語』(七一 野間児童文学賞)は代表作。自ら明治末、大正はじめの子どもの風俗をよみがえらせている。『虹の小箱』(四六)は『少年小説大系』(八六)に入る。戦争を捉えた『かわいそつなぞう』(七〇)は教科書にも採用され評判を呼ぶ。俳句の宗匠であった父の血を受け、独自に童句の世界を拓き、『少年の日』、『えん日』などの童句集もある。童句文学碑が狭山市に建つ。(西沢正太郎)

筒井敬介 けいけい 一九一八 (大7) 児童文学作家。本名小西理夫。東京生まれ。慶応大学在学の戦中より児童演劇運動に参加、劇団「東童」の文芸部員として活躍した。戦後、児童文学執筆に転じ、『コル

プス先生汽車へのる』（一九四七）、『チョコレート町一ばんち』（四九）などの風刺とユーモアにあふれた作品をインターナショナルな道具立てのもとで展開し、「無国籍もの」と呼ばれるジャンルで注目作を多数発表し、独自の世界を切り開いた。また、NHKの脚本部の専属ライターとして、青木茂の『三太物語』を連続放送劇（五〇〜五一）に脚色、好評を博したほか、幼児番組『おかあさんといっしょ』では、金曜日の『ラッポントン』を担当し、幼児向けバラエティショーに新境地を開拓。飯沢匡と並んで子ども番組に文学的な良心を注入し続けた。一九七〇年代に入ると、活動の重点を再び児童文学に移して、脂の乗り切った意欲作を発表し、『かちかち山のすぐそばで』（七二）は、七三年度サンケイ児童出版文化大賞、七三年度国際アンデルセン賞国内賞を受賞。『じんじろべえ』（六七）、『ちゃんめら小平次』（七二）などともに民話的な世界を現代によみがえらせる試みを成功させている。戦中より戯曲の創作も旺盛で、『コルプス先生動物園へ行く』（五三）、俳優座子どもの劇場上演作品、『犬がほしいなあ』などを勢力的に発表し続けている。その他の代表作として、『おねえさんといっしょ』（五五）、『げらつくすノート』（七三）、『たっちゃんといっしょ』（七九）、『日曜日のパンツ』（八〇）、『雨ですてきなたんじょうび』（八二）、『筒井敬介児童劇集』全三巻（八二）など。

「かちかち山のすぐそばで」（かちかちやまのすぐそばで） 一九七二年に単行本として発表された中編童話。昔話『かちかち山』の世界に仮託して、人間の欲望や栄栄や汚辱などの世界を、シニクに描いた諷刺物語で、瀬川康男の版画風な挿絵とともに、ユニークな一冊として高く評価された。作者によって同名の『お伽芝居』と銘うつ脚色作品があり『筒井敬介児童劇集1 何にでもなれる時間』（八二）に収録されている。（片岡 輝）

**筒井康隆**（つつい かつら） 作家。大阪市生まれ、動物学者筒井嘉隆の長男。同志社大学で心理学を学び卒業。工芸社、コマーション・デザインスタジオの仕事をし、一方でSF同人誌「NUIT」「NIGHT」を主宰。一九六五年ごろから作家生活に入った。直木賞候補にしばしば名があがっていたが、八一年『虚人たち』によって泉鏡花賞を受賞、どたばた、ナンセンス、パロディ、という作風に強く惹かれる読者が多いが、その思想性は論じられる価値がある。ジュニアSF『時をかける少女』、SF童話『かいじゅうゴミイ』『三丁目が戦争です』など児童向けの作品もある。

**続橋達雄**（つづきはし たつお） 一、九二八（昭三） 児童文学研究者。東京に生まれ、国学院大学国文学科卒業。国学院大学栃木短大教授。学生時代子ども会サークル運動の中で賢治童話にめぐり合い、以後その魅力のとり

ことなる。「四次元」誌を中心とする宮沢賢治研究会で本格的賢治研究に取り組み、『宮沢賢治・童話の世界』（二九六九）、『宮沢賢治・童話の軌跡』（七八）などの著作を生む。他方、近代児童文学史上に占める賢治童話の位置を見定めようと、明治の児童文学を幼年雑誌を手がかりに研究し、『児童文学の誕生』（七二）にまとめる。その学風の特徴は、柔軟な感性を秘めた緻密な作品鑑賞と学問的実証の手堅さにある。鳥越信らと組んで編集した『校定新美南吉全集』全一二巻、別巻一（八一〜八三）は、日本児童文学学会賞を得、新美南吉再検討への道を拓いたものとして、高く評価されている。

（関口安義）

#### 都築益世

まつよ

一八九八〜一九八三（明31〜昭58）詩

人、医学博士。大阪市玉造に生まれる。中学生時代から『芳水詩集』を読み、慶応大学医学部在学中に、福士幸次郎のパスツール詩社に詩を投じ、川路柳虹の「炬火」同人になり、「赤い鳥」に投稿した童謡『てんとむし』が推奨を受けたりした。詩集『明るい街』（一九三二）は、磨かれたことばと都会的センスによって表現されていたが、彼の童謡も、温かな心、洗練されたことばによってつづらられている。彼の創刊した童謡誌「ら・て・れ」（五七）は、戦後の童謡発展に寄与したが、「炬火」以来の詩友今岡弘が詩誌「草原」を創刊（七四）すると、これに参加して、歿するまで詩と童謡を書き

続けた。主な著書には、『童謡集』（四〇）、童話集『ふしぎないえ』（四八）、童謡集『赤ちゃんのお耳』（七七）、『都築益世詩集』（七八）などがあり、童謡『ぶらんこ』は愛唱されている。小児科開業医でもあった。（薩摩 忠）

#### 綴方運動

うんどう

綴方の教育を人間形成の一環として考えることを、推し進める運動。一九一八年（大

七）、鈴木三重吉による児童芸雑誌『赤い鳥』の創刊が端緒となった。そこでは芸術家たちが子どものための作品を発表しただけでなく、子どもたち自身の自由な表現活動に舞台を提供した。ほぼ同時期に教育界でも綴方教育の方法をめぐって研究・討議が活発になり、蘆田恵之助と友納友次郎との間に「随意選題か、課題か」をめぐって公開討論も行われ、多くの教師たちの関心が深まった。しかし、綴方運動が高揚したのは三〇年代である。その時期、日本社会は経済的にも困難な状況に遭遇し、政治的にはファシズム化への道をたどった。良心的な教師たちは、子どもの生活現実を直視し、国家統制の厳しい中で、子どもとともに生きる道を探しようとした。綴方教育はそのために中心的な役割を果たした。「綴方生活」「教育・国語教育」「綴方倶楽部」などの雑誌が東京から出されて全国的に読者を獲得したし、「北方教育」（秋田）、「国語人」（鳥取）、「国語教育研究」（仙台）など各地方でも研究・実践の成果が発表されていった。それらを総称して生活綴方運

動と呼んでいる。戦後の綴方運動は五〇年代に入って再び高揚した。その契機になったのは無着成恭編『山びこ学校』であり、今日も日本作文の会を中心として運動は発展してきている。

【参考文献】中内敏夫『生活綴方成立史研究』(二九七〇 明治図書、滑川道夫『日本作文綴方教育史』1-3 (一九七七) 八三 国土社)

壺井 栄 さかえい 一九〇〇〜六七 (明33〜昭42) 小

説家、児童文学作家。香川県小豆郡坂手村(現内海町)生まれ。樽職人岩井藤吉の五女、一〇人兄弟の六番目である。高等小学校卒業後、仕事が不振の父に代わって、郵便局員や村役場の吏員として、脊椎カリエスを病む身で家計を支えた。一九二五年、上京して同郷の詩人壺井繁治と結婚。左翼文化運動に加わっていた夫の検挙、入獄などを体験するとともに、佐多稲子、宮本百合子ら女流文学者とも親しくなった。この間、幼い姪を引き取って育てるなど、自分の子ほもたなかったが、日常生活に根を下ろすという態度は終生失わなかった。三五年ごろから執筆をはじめ、三八年の『大根の葉』、四〇年の『暦』など、生家をモデルにした小説で認められ、最初の創作集『暦』(一九四〇)で第四回新潮文芸賞を受賞した。このころから佐多稲子の勧めで児童文学を書くようになり、以後、小説と児童文学は栄の活動の両輪となったが、子どもから大人までを讀者

(中野 光)

対象とする作品も少なくなく、栄自身、小説と児童文学を画然とは区別せず、そこに栄の文学の一つの特徴がある。児童文学においては、四四年に最初の作品集『夕顔の言葉』と書き下ろしの『海のたましひ』の二冊を刊行し、戦後も引き続いて多くの作品を書いた。

『海のたましひ』を改作した『柿の木のある家』(四九)で五一年に児童文学者協会賞を、『坂道』『母のない子と子のない母と』(『海への村の子供たち』改作)などで、五二年に芸術選奨文部大臣賞を受賞。『二十四の瞳』(五二)は、昭和二〇年代の児童文学を代表する作品の一つとなったが、木下恵介監督、高峰秀子主演で五四年に映画化され、映画自体が秀作で大ヒットするとともに、栄の文学をさらに広く普及させた。五五年、小説『風』により第七回女流文学賞を受賞し、五六年には小説の代表作『褌襦』を刊行。六四年には、『壺井栄児童文学全集』全四巻が出版された。六一年ごろから喘息の発作で入院を繰り返していたが、六七年六月二三日、気管支喘息により死去。

栄の文学は、郷土の小豆島の穏やかな風土、そこに生きてきた民衆の心と生活、二人の孤児を含め二人の子どもを育てた祖母や両親の生き方などを背景に、すべての生あるものへのいとおしみを、日常性の中で捉えるものとして形成されている。『二十四の瞳』をはじめ、反戦的なものが多いのは、栄の生きた時代とそ

の生活の反映であるとともに、何よりも戦争が人々の日常性を破壊し、その生命をも奪う最大の悪だからである。単なる戦争否定だけではなく、国家権力への抵抗も作品の基底にあるが、それらが庶民の日常とその怒りや悲しみを通して表現されていることが、読者層を幅広いものに行っているといえよう。

〔二十四の瞳〕<sup>のひとみ</sup> 長編小説。雑誌「ニュー・エイジ」一九五二年二月一月号連載。五二年二月、光文社から刊行。昭和三年春、岬の分教場に赴任した新卒の大石久子と、最初の生徒である二人の一年生は、久子のけががもとでしっかり結ばれた。戦争は二人にも襲いかかり、三名の戦死者などの犠牲者が出るとともに、久子も夫を失った。戦後再び岬の分教場で教えることになった久子に、残った七名が歓迎会を開く。教師と教え子の二〇年にわたる心の触れ合いを通じて、戦争を告発した感動的な物語である。

【参考文献】瀬沼茂樹「作家と作品」(一九七三『日本文学全集』76集英社)、小田切進「壺井栄解説」(一九七八『日本児童文学大系22』ほるぷ出版) (長谷川潮)

坪内逍遙 <sup>つほう</sup> 一八五九〜一九三五(安政6〜昭

10) 小説家、劇作家、評論家、翻訳家、教育家。本名勇蔵、のち雄蔵。春の屋敷などの別号もある。美濃国(現在の岐阜県)に生まれる。一八七六年、県の選抜学生として上京、開成学校(のちの東京帝国大学)を卒業し、

東京専門学校(現早稲田大学)の講師を務めるかたわら、八五年に小説『当世書生氣質』と論文『小説神髓』を発表して、我が国における近代文学の成立に先駆的役割を果たした。その後、『桐一葉』(一八九四)、『牧の方』(一九〇六)などの新史劇を書いて歌舞伎劇の改良に努め、一九〇六年(明治39)には島村抱月を支援して文芸協会を起し、シエークスピアやイブセンを紹介して新劇運動の基礎を築いた。また、逍遙は教育の改革にも熱意をもち、早稲田中学の教頭・校長を歴任し、富山房の委嘱による小学校国語教科書の編集をしている。晩年は野外劇や児童劇の運動に熱心に取り組み、帝劇技芸学校生徒による児童劇を指導、上演。『児童教育と演劇』(一九二三)という演劇教育の理論書を出すとともに児童劇脚本集『家庭用児童劇』三卷(二二〜二四)、『学枚用小脚本』(二三)を刊行、その後の児童劇運動に大きな影響を与えた。

【参考文献】河竹登志夫『児童劇における坪内逍遙』(一九五九)、富田博之『坪内逍遙の児童劇運動』(一九七六『日本児童演劇史』東京書籍) (富田博之)

坪内譲治 <sup>じょうち</sup> 一八九〇〜一九八二(明治23〜昭57)

小説家、児童文学作家。岡山県御野郡石井村島田(現岡山市島田本町)生まれ。父平太郎、母幸の次男。兄、姉、弟二人。父はランプの芯を製作する島田製織所を創設したが、譲治八歳の時死去。慶応義塾の学生だった兄



が家業を継ぐ。一九〇七年金川中学校を卒業。〇八年早稲田大学文科予科に入学、鶴巻町のキリスト教青年会早稲田支部寄宿舎に入る。一時兄の経営する北海道旭川の牧場を手伝ったが、八月復学。同級生に谷川精二や広津和郎がいた。一〇年早稲田大学英文科に進学。しかし、徴兵検査延期の手続きをしていなかったため一年志願兵として入隊。一二年再入学、三田四国町の統一教会で洗礼を受ける。九月肺炎カタルで茅ヶ崎の南湖院に入院。一三年八月退院し復学。同級生に青野季吉、細田源吉、細田民樹、直木三十五、西条八十などがいた。大学時代の彼は中退復学の繰り返しであったが、多くの文学の友とめぐり会うことができた。一五年早稲田大学卒業。一六年二月前田浪子と結婚。同月トルストイの短編『コルネイヴシリエフ 外一編』を洛陽堂から処女出版。一二月長男正男誕生。府下北豊島郡高田町(現豊島区西池袋二―三―二〇)に移転、定住する。雑誌「黒煙」を創刊して創作活動を行っていたが母や兄の希望で家業の島田製織所の仕事を手伝うことになり、岡山に帰る。二〇年同人誌「地上の子」に『正太の馬』を発表。次男善男誕生。二三年東京へ戻り文学に専念する。三男理基男誕生。二六年から童話を書きはじめ、『正太の汽車』(「子供之友」)、『蛙』(「婦人の友」)などを発表。その年「新小説」に転載された『正太の馬』が認められ、最初の短編集『正太の馬』が春

陽堂から文壇新人叢書として出版された。二七年六月鈴木三重吉主宰の「赤い鳥」に童話「河童の話」を発表。続けて『善太と汽車』、『正太と蜂』、『樹の下の宝』などを発表、「赤い鳥」の常連寄稿家となる。他方「山陽新聞」「東京新聞」「都新聞」に小説を連載したが、社会不況のため家計は苦しく、再び島田製織所に勤務することになり、妻子を東京に残して単身岡山に赴任。仕事のかたわら文筆活動を続ける。三〇年、兄の自殺と母の死に遭い衝撃を受ける。兄の後を継いで専務取締役に就任したが、三三年株主総会で兄の子どもに株を買収され取締役を下ろされたため、即日上京。背水の陣の心境で小説と童話の執筆に当たる。「赤い鳥」にほとんど毎号童話を発表。島田製織所をめぐる骨肉の争いは、その後の坪田文学の主要な題材となった。三五年突然彼に幸運が訪れた。三月山本有三の紹介で「改造」に発表した『お化けの世界』が大きな反響を呼んで、たちまち彼は時代の寵児となり、四月に短編集『お化けの世界』、七月に処女童話集『魔法』、一〇月に短編集『晩春懐郷』、一月に『狐狩り』を出版。彼は後年当時を振り返って「暗い空模様が次第に晴れて行くようにおもわれた」と書いている。『お化けの世界』はその後劇化され、「東京朝日新聞」夕刊に連載した『風の中の子供』は大人も子どもも愛読する新しい家庭文学として好評を博し、映画化された。続い

て三八年「都新聞」に連載した『子供の四季』は北村透谷賞、新潮社文芸賞を受賞、明治座で上演。彼の童話の主な発表雑誌だった「赤い鳥」は三重吉の死により三六年一〇月で廃刊になったが、彼の童話執筆は小説と並行して盛んに行われ、三八年には最初の評論集『児童文学論』を刊行。「児童文学」とても、成人の文学同様、『如何に生くべきか』を探究するものでなければならぬ、「子供には現実を教えたい。現実の中に夢を見せたい」と提唱して、新しいリアリズム児童文学誕生の機運をつくった。四三年、最初の昔話集『鶴の恩がえし』を刊行したあと、海軍報道班員として南方へ派遣され、翌四四年帰国。四五年四月から野尻湖畔に疎開、終戦を迎えた。戦後最初の童話集は一二月に出した『谷間の池』。四七年一月児童雑誌『童話教室』を主宰。五〇年還暦を記念して『坪田譲治童話集』を刊行。『坪田譲治全集』全八巻によって五五年三月日本芸術院賞を受ける。五六年日本児童文学者協会会長就任。この年から書齋を北多摩郡久留米町（現久留米市学園町）に移す。六一年雜司ヶ谷の自宅に「びわの実文庫」を開設。六三年童話雑誌「びわの実学校」を創刊、主宰した。六八年『坪田譲治童話全集』全一〇巻、六八年童話集『かっぱとドンコツ』出版、サンケイ児童出版文化賞を受賞。七三年童話集『ねずみのいびき』刊行、翌年野間児童文芸賞受賞。七四年一月には長年の

業績と「びわの実学校」一〇年の実績により朝日賞（文化賞）受賞。七七年六月米寿の祝いを椿山荘で行う。この月から『坪田譲治全集』全一二巻が新潮社から出版。八〇年六月卒寿の祝いが再び椿山荘で行われた。八二年七月七日死去。子どもの生活や心理をリアルに描いて、いきいきとした典型的な児童像をつくりあげ、また小説と同様、童話にも人生を描いて、子どもの文学を大人の文学と同じレベルまで高めたことや、「童話教室」「びわの実学校」の主宰者として、また児童文学者協会会長として常に後進を導き、多くの優れた児童文学者を育てあげた功績は高く評価すべきである。

〔魔法〕<sup>まほう</sup> 童話集。一九三五年、健文社刊。「赤い鳥」に発表した童話の中から、いわゆる「善太・三平もの」と呼ばれる作品を中心に一七編を収録。標題の作品『魔法』は、同年一月号に掲載された作品。魔法をかけるという兄と、そのことを半信半疑で聞く幼い弟の様子、ほほえましい会話と写実的な情景描写で、生き生きと描き出されている。同年四月出版した短編集『お化けの世界』の中の『けしの花』は、『魔法』の結末部を小説的に書き換えたものである。

「ねずみのいびき」童話集。一九七三年。晩年の譲治は、幼年時代の思い出をしきりに描いた。標題の『ねずみのいびき』も子どものころの思い出話で、泥棒になつて村にこっそり戻ってきた若者が、ある屋敷の天

井に隠れ住んでいたが、いびきが原因でみづかり、村人の見ている前で父親に縄をかけられる。ほかにも人生のユーモアとペーソスを感じる話が、いろいろと思いつく風にかかれてる。

【参考文献】関英雄・水藤春夫編『坪田譲治童話研究』（一九七一年）坪田譲治童話全集 別巻『所収 岩崎書店』、西田良子『坪田譲治—坪田文学における「小説」から「童話」』（一九七三年）講座日本児童文学6『明治書院』、坪田理基男『坪田譲治作品の背景—ラック・ソルベ社にまつわる話』（一九八四年）理論社（西田良子）

## 坪田理基男

（一九二三年—）（大12） 児童文学作家。東京に生まれる。父は作家の坪田譲治。明治

大学在学中に学徒兵として海軍に入る。戦後両親の疎開先長野の野尻湖畔に復員。復学して卒業後は出版社、雑誌社で編集に携わる。壺井栄の『二十四の瞳』の連載を得たのもその間の功績、のち『びわの実学校』同人として創作活動に入る。『絵をかくはと』、『にせアカシアの花』（一九七二年）など地味な作風ながら心にしみる佳編を出す。『坪田譲治作品の背景』（八四）は父の苦闘の跡をたどる貴重な資料である。（西沢正太郎）

## 坪谷善四郎

（一九一二年—）（大12） 昭和

24 編集者。号水哉。新潟県加茂町に生まれる。東京専門学校（現早稲田大学）の政治科および行政科卒。大橋佐平に知られ在学中より博文館に入社（一八八八）し、博文館初期の編集主幹・編集局長として活躍。児童出

版においては「幼年雑誌」（日本全国筆戦場）（九二）、「少年世界」（九五）、「少年文集」（九五）、「中学世界」（一九〇〇）などを、従前の諸誌を改廃して創刊した。また図書館設置運動を続け、この方面の功労者である。自らも大橋図書館館長に就任（二七）した。著書に『博文館五十年史』（二三）ほか多数。（滑川道夫）

## 鶴見正夫

（一九二六年—）（大15） 童謡詩人、

児童文学作家。新潟県村上市に生まれる。一歳半で父と死別。中学時代から詩を習作。早稲田大学に入って童謡を書きはじめ、政治経済学部卒業と同時に童謡集『一本の杖』（私家版）を出す。一九五一年毎日新聞社の童謡コンクールで一位入選、同年童謡『ちやつぶりこ』で文部大臣奨励賞受賞。出版社、国会図書館などの勤務を経て六〇年文筆一本の生活に入る。童謡では、童心主義にたよらないで直接詩を作ること、歌われることなどをモットーとして、六三年、阪田寛夫、関根栄一らと「6の会」を結成、一一年間意欲的な創作活動を行った。詩集に名作『あめふりくまのこ』（一九六二）、NHKテレビ放映などの童謡も収録した少年詩集『日本海の詩』（七四）がある。少年小説や伝記などもあり、郷里への愛着は強く、郷里を題材とした作品が際立って多く、『最後のサムライ』（七二）、『鮭のくる川』（七四）、『八月のサンタクロース』（八二）などが数えられる。なお、日本童謡史上の有名作の背景を論じた『童

謡のある風景』(八四)というエッセイ集、夭折した詩人矢沢宰の生涯を描いた『若いいのちの旅』(八六)という伝記も著している。「あめふりくまのこ」で第六回日本童謡賞、赤い鳥文学賞特別賞受賞。(西條和子)

## テ

デ・アミーチス エドモンド Edmondo De Amicis

一八四六—一九〇八 イタリアの作家、児童文学作家。ピエモンテ地方のオネーリアに生まれた。幼いころから父に愛国心や、貧しい者・弱い者への愛について教えられる。一四歳の時、愛国詩人ジュゼッペ・ジュステイの詩に感動して、イタリア独立運動に加わりうとして果たせず、その後モデナの陸軍士官学校に入学した。一八六五年に歩兵少尉に任官し、第三独立戦争に小隊長として各地を転戦した後、シチリアでコレラにかかってフィレンツェに戻ってからは、雑誌「イタリア陸軍」の編集に当たった。そしてその誌上に連載した『*Bozzetti di vita militare* 軍隊物語』をもって作

家生活に入った。その後の彼の作家生活は、およそ次の三つの時期に分けられる。第一期は七二年から七九年に至る時期である。この時期に、彼はイタリアの各地をはじめ、地中海沿岸の各国や、オランダ、イギリスなどを精力的に歩きまわり、『*Spagna* スペイン』(一八七二)、『*Olanda* オランダ』(七四)、『*Constantinopoli* コンスタンチノープル』(七九)などの旅行記を出版した。第二期は七九年から八九年に至るほぼ一〇年で、代表作『クオーレ』(八六)はこの時期に書かれた。『クオーレ』は、我が国では、杉谷代水『小説教育童日誌』(一九〇二)など、明治期から翻訳、再話があり、その後『愛の学校』という名で親しまれた時期も長かった。この時期にはもう一つの重要な作品『*Sull' Oceano* 海上にて』(一八八九)もある。この作品は貧しいイタリア移民に取材したものである。九〇年にはじまる第三期は、社会主義への鋭い傾きと、数多い教育的な著作によって代表される。九一年の社会党入党、その後、続く母の死と、息子フーリオの不慮の死など、波乱の多い晩年でもあった。この時期の著作には『*Il romanzo di un maestro* ある先生の物語』(九〇)、『*Tra casa e scuola* 家庭と学校の間』(九二)、『*Ricordi d'infanzia e di scuola* 少年時代と学校の思い出』(一九〇二)などがある。歿したのはボルディゲラであった。

「クオーレ」*Cuore* 長編童話。一八八六年。デ・アミー